

板野博行の 夏期講習DVD 古文・基礎編

— 付属テキスト —

- 【一】 『古本説話集』
～ 学習院大学 法学部 (一部改編)
- 【二】 『栄花物語』
～ 法政大学 文学部 (一部改編)
- 【三】 『源氏物語』
～ 東洋大学 A方式 (一部改編)
- 【四】 『大和物語』
～ 明治大学 政治経済学部

『板野の入試国語DVD講座』のご案内

この度は『板野の入試国語DVD講座』をお買い上げいただき誠にありがとうございます。この教材で学習を始める前に、以下の点についてのご確認をお願いします。

■ 学習方法に関して

まずは Disk 1 に収録されている「ガイダンス」を見ましょう。この教材の学習目的から夏の勉強計画、効果的な学習法などを解説しています。

このガイダンスで、入試本番までの全体を見渡す広い視野と、この夏における到達目標をしっかりと持つことが大切です。

そして付属テキストに掲載されている問題を解きましょう。

この夏期講習の教材では、制限時間を意識して解くよりも、1問1問をしっかりと考えて解くということを心掛けて下さい。演習の中で解らない単語や語句などがあれば、解説授業を見る前に辞書などで調べておくとう良いでしょう。

問題を解き終えたら、該当する「解答・解説授業」にて板野先生による解説授業をご覧ください。授業では大事なポイントを板書していきますので、書き写すノートもご用意下さい。

1度授業を見終えても、時間をおいて再度復習を重ねましょう。さらなる理解が深まります。知識や解法がしっかりマスターできるまで、繰り返し学習することが合格への近道です。

■ サポートに関して

DVD 授業の中での解らない点については、メールによる質問・相談サポートを行っております。

ご質問は「イエジューク」(<http://iejuku.jp/>)内の「サポート」ページよりお問い合わせ下さい。

サポートフォームの「件名」欄に 該当の商品名、「お問い合わせ内容」欄に 質問の内容 を詳しくご記入下さい。

いただいたご質問への回答は、メールにて行いますので、メールアドレスの入力はお間違えないようお願いいたします。また、@iejuku.jp ドメインからのメールを受信できるよう各自設定をお願いいたします。



1

出典：『古本説話集』
学習院大学 法学部（一部改編）

解答・解説DVD — Disk 2

【一】 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

今は昔、大和の国に長者ありけり。家には山を築き、池を掘りて、いみじきことどもを尽くせり。門守りの女の子なりける童の、真福田丸まふくだまるといふありけり。春、池のほとりにいたりて、芹を摘みけるあひだに、この長者のAいつき姫君、出でて遊びけるを見るに、顔かたちえもいはず。これを見てより後、この童、Bおほけなき心つきて、嘆きわたれど、かくとだにほのめかすべきたよりもなかりければ、つひに病ひになりて、そのこととなく臥したりければ、母怪しみて、そのゆゑをあながちに問ふに、童ありのままに語る。すべてあるべきことならアば、わが子の死なんずることを嘆くほどに、母もまた病ひになりぬ。その時、この家の女房ども、この女の宿りに遊ぶとて、入りて見るに、二人の者病み臥せり。怪しみて問ふに、女の言ふやう、「Cさせる病ひにはあらず。しかしかのことのD侍るを、思ひ嘆くによりて、親子死なんとイなり」と言ふ。女房笑ひて、このよしを姫君に語れば、あはれがりて、「やすきことなり。早く病ひをやめよ」と言ひければ、童も親もかしこまりて、喜びて、起きあがりて、物食ひなどして、元のやうになりぬ。姫君言ふやう、「忍びて文など通はさむに、手書かざらん、口惜し。手習ふべし」。童喜びて、一二日に習ひ取りつ。またいはく、「わが父、ただ死なむこと近し。その後、何ごとをも沙汰せさすべきに、文字習はざらん、わろし。学問すべし」。童、また学問して、物見明すほどになりぬ。またいはく、「忍びて通はん、童、見苦し。法師になりぬべし」。すなはちなりぬ。またいはく、「そのことなき法師の近づかん、怪し。心経・大般若など誦むべし。祈願せウやうにもてなさん」と言ふに、言ふに従ひて誦みつ。またいはく、「なほいささか修行せよ。護身するやうにて近づくべし」と言へば、また修行に出で立つ。姫君あはれみて、藤袴を調じてとらす。片袴をば、姫君みづから縫ひつ。これを着て修行しありくほどに、この姫君、はかなく煩ひて失せにけり。かくし廻りて、Eいつしかと歸りたるに、「姫君失せにけり」と聞くに、悲しきこと限りなし。それより道心深くおこりければ、ところどころ行なひありきて、尊き上人にてぞおはしける。名をば智光とぞ申しける。つひに往生してけり。あとに弟子ども、後のわざ、行基菩薩を導師に請じたてまつりけるに、礼盤にのぼりて、「真福田丸が藤袴、我ぞ縫ひし片袴」と言ひて、Fことごとくも言はでおり。弟子ども怪しみて、問ひ、Gたてまつりければ、「亡

者智光、かならず往生す **エ** し人なり。はからざるに惑ひに入りなければ、我、はうべんにて、かくは誘へたるなり」とこそ
のたまひ **オ**。

(『古本説話集』による)

(注) 1 藤袴——この場合、僧侶の粗末な衣。

2 片袴——袴の両脚の片方。

3 後のわざ——死後の法要。

4 礼盤——仏を礼拝する時に登る高い壇。

問1 傍線部 A・B・C・E の意味としてもっとも適切なものを、次の 1～5 の中からそれぞれ一つ選んで、番号で答えなさい。

A いつき姫君

1 同居の姫君

2 秘蔵の姫君

3 氣立てがよい姫君

4 慈愛あふれた姫君

5 かわいらしい姫君

B おほけなき心

1 噂になりかねない恋心

2 身のほど知らずの恋心

3 あまりに情熱的な恋心

4 突然生じた予想外の恋心

5 お話にならない滑稽な恋心

C させる病ひにはあらず

- 1 たいした病気ではない
- 2 治療が必要な病気ではない
- 3 軽い病気というのではない
- 4 人のせいのできる病気ではない
- 5 人にうつるような病気ではない

E いつしかと帰りたるに

- 1 いつのまにかに帰りついたところ
- 2 一刻もはやくと思つて帰つたところ
- 3 これという理由もなく帰つたところ
- 4 いつ頃になるかと案じつつ帰つたところ
- 5 いつかはつくだろうとのんきに帰つたところ

問2

空欄 [ア] には助動詞「ず」、[イ] には動詞「す」、[ウ] には助動詞「さす」、[エ] には助動詞「べし」、[オ] には助動

詞「けり」を、それぞれ活用させた語が入ります。適切に活用させて、解答欄に記入しなさい。

問3

傍線部 D・F・G の敬意の対象は誰ですか。もつとも適切なものを、次の1～8の中からそれぞれ一つ選んで、番号で答えなさい。なお、同じ記号を二度以上使つてもかまいません。

- | | | | |
|---------|--------|------|--------|
| 1 真福田丸 | 2 女房ども | 3 行基 | 4 弟子ども |
| 5 門守りの女 | 6 智光 | 7 親子 | 8 長者 |

問4 本文の「姫君言ふやう……」から「……出で立つ」にかけての、「姫君」と「童」とのやりとりの説明として、もっとも

適切なものを、次の1～6の中から一つ選んで、番号で答えなさい。

- 1 道心深い童は、姫君の恋心をいさめようとした。
- 2 姫君は童の道心が真実か否かを確かめようとした。
- 3 姫君は童の恋心を逆手にとって、童を仏道へと導いた。
- 4 童は姫君の信心深さに感動し、気に入られるよう努力した。
- 5 姫君と童とは、結局のところ心が通いあうことはなかった。
- 6 童は自身の真心が姫君に通じるかどうかを確かめようとした。

問5 本文と同様の文学ジャンルに属する作品を、次の1～8の中から一つ選んで、番号で答えなさい。

- | | | | | | | | |
|---|-----|---|------|---|-------|---|------|
| 1 | 大鏡 | 2 | 伊勢物語 | 3 | 好色一代男 | 4 | 方丈記 |
| 5 | 沙石集 | 6 | 更級日記 | 7 | 去来抄 | 8 | 平家物語 |

(以下余白)

2

出典：『栄花物語』
法政大学 文学部（一部改編）

解答・解説DVD — Disk 2

【二】 次の文章は藤原道長が娘嬪子の葬儀を終え、悲しみに暮れている場面を描いたものである。以下を読んで後の問いに答えよ。

殿は、御堂みだうにおはしまして、やがて上うへの御方かたにおはします。日ひごろは、さてもこの御扱おつかひにて過ぎつれば、慰むやうもありつるに、今はかくぞかしと思しめすに、むげに思しほれさせたまへれば、山やまの座主ざす参りたまひて、「いみじく思しめしたることなれば、^A聞きえさするにつけても心こころ幼きやうにはべれど、なほいかに思しめしとらせたまへるぞ。今はとざまかうざまに思しこそ慰めさせたまはめ。この世に、御幸ごこうひも御心ごこころ掟おきても、殿の御やうに、思しめし掟おきてつることに事たがはせたまはず、あひかなはせたまふ人はおはしましなんや。この三十年のほどはさらに思しむすばほることなくて過あやさせたまひつるに、いかでかかることまじらせたまはざらん。この娑婆しやば世界は、苦楽ともなる所とは知らせたまひつらんものを。仏ぼんだに凡夫ぼんぷにおはせし時、堪かへがたきことを堪かへ、忍しのびがたきことをよく忍しのびたまひてこそ、仏ともなりたまひ、衆生しゆじやうをも渡したまへ。今はこの御女ごめ一所いしよをこそ、かつは ^Aいみじかりけるわが亡者むじやうかな、ここの年月としつきの念仏ねんぶつやいたづらになりぬらんと、心憂こころく思しめし、またお返ししては、^Bれ ^Bいみじかりける善知識ぜんちしきかな、樂たのしみありて苦しみはなしとのみ知りたりつるを、悲しみも苦しみもともに知らせつることと、よろづに方々に思し得て、真心まごころに念仏ねんぶつさせたまはばこそ、わが御ための善知識ぜんちしきともなり、亡者の御ため菩提ぼだいのたよりともならめ。年としごろ権者ごんじやうとこそ見たてまつりはべれど、あさましうはかなうおはしけり」と、世間の理ことわりを申しつくしたまへば、「いかがは。さ思おもひとりて ^Aはべりや。されどそれがただ恋しきなり」とのたまはするままにも、御目ごめより水精すいじやうを貫つらきたるやうに続きたる御涙ごなみいみじうて、山の座主ざすも泣なきたまひぬ。御念仏ごねんぶつのをりごととに、殿みまの御前ごまへ度たびごととに申まをさせたまふに、御涙ごなみやがて続きたちたり。「いとかたじけなう、なほよろしきほどに孝けうじ ^ウきこえさせたまへかし」とのみ申す人々多かり。

(『栄花物語』より)

(注) 山の座主——天台座主のこと。ここでは第二十六代座主、院源をさす。

問1 傍線部ア～ウの敬語はそれぞれ誰から誰に敬意を表したもののか、適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- | | | | | |
|----------|----------|----------|----------|-----------|
| 1 作者から道長 | 2 作者から院源 | 3 作者から嬉子 | 4 院源から道長 | 5 院源から嬉子 |
| 6 道長から院源 | 7 道長から嬉子 | 8 人々から道長 | 9 人々から院源 | 10 人々から嬉子 |

問2 傍線部A・Bの「いみじかりける」の解釈として最も適切な組み合わせを次の中から選び、番号で答えなさい。

- | | | | |
|-----------|---------|-----------|-------|
| 1 A すばらしい | B すばらしい | 2 A すばらしい | B ひどい |
| 3 A ひどい | B すばらしい | 4 A ひどい | B ひどい |

問3 つぎの1～4の文について、本文の内容と合致するものにはAを、合致しないものにはBをそれぞれ答えなさい。

- 1 悲しみに暮れる道長であったが、それでも葬儀を営んでいた頃は、今ほどの悲しみを感ぜずに済んでいた。
- 2 院源は道長に仏でさえ様々な苦勞をしたのだから、道長にも一層の苦勞を体験し、民に恵を施すよう諭している。
- 3 院源は道長のことを長年尊敬していたが、あまりの悲嘆の暮れように、情けないものだとか心から落胆している。
- 4 悲しみから立ち直ることができない道長に対して、周囲の貴族たちはあれこれ言葉を尽くして慰めた。

問4 藤原道長の活躍時期に成立した文学作品を次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | | | |
|--------|----------|---------|----------|---------|
| 1 伊勢物語 | 2 宇治拾遺物語 | 3 古今和歌集 | 4 とはすがたり | 5 和漢朗詠集 |
|--------|----------|---------|----------|---------|

(以下余白)

3

出典：『源氏物語』
東洋大学 A 方式（一部改編）

解答・解説DVD — Disk 3

【三】 次の文章は『源氏物語』の「夕顔」の巻の一節である。読んで後の問いに答えよ。

風すこしうち吹きたるに、人はすくなくて、さぶらふ限りみな寝たり。この院の預りの子、むつましく使ひたまふ若き男、また上童一人、例の隨身ばかりぞありける。召せば、御答へして起きたれば、**A**「紙燭さして参れ。隨身も弦打して、絶えずこわづくれ、と仰せよ。人離れたる所に、心とけて寝ぬるものか。惟光の朝臣来たりつらむは」と問はせ**A**ば、**I**「さぶらひつれど、仰せ言もなし、暁に御迎へに参るべきよし申してなむ、まかで**B**ぬる」と聞こゆ。このかう申すものは、**注**② 滝口なりければ、弓弦いどつきづきしくうち鳴らして、**ウ**「火あやふし」と言ふ言ふ、預りが**注**③ 曹司のかたに去ぬなり。内裏をおぼしやりて、**注**④ 名対面は過ぎぬらむ、**注**⑤ 滝口の宿直奏今こそ、とおしはかりたまふは、まだいたうふけぬにこそは。帰り入りて探りたまへば、**注**⑥ 女君はさながら臥して、**注**⑦ 右近はかたはらにうつぶし臥したり。**E**「こはなぞ。あなもの狂ほしの物懼や。荒れたる所は、狐などやうのもの、人おびやかさむとて、け恐ろしう思はするならむ。まるあれば、さやうのものにはおどされじ」とて、引き起こしたまふ。**オ**「いとうたて、みだりごこちのあしう**C**ば、うつぶし臥してはべるや。御前にこそわりなくおぼさるらめ」と言へば、**カ**「そよ。などかうは」とて、かい探りたまふに、息もせず。引き動かし**D**ど、なよなよとして、われにもあらぬさまなれば、いといたく若びたる人にて、ものにけどられぬるなめり、と、せむかたなきこちしたまふ。

(注) 1 惟光の朝臣——源氏の君の家臣

2 滝口——清涼殿東北方にある滝口に控えて、宮中の警備にあたる武士

3 曹司——部屋

4 名対面——午後九時に宿直の殿上人が上司に名を名のり、出勤報告をすること

5 滝口の宿直奏——名対面のあと、すぐに滝口の宿直の武士が点呼を受けて名のること

6 女君——夕顔。右近の主人

7 右近——女房

問1 空欄A・B・C・Dにあてはまる語を、次の中から選べ。ただし、同じ語を二度使ってもよい。

- | | | | | |
|-------|-------|--------|-------|--------|
| 1 たまは | 2 たまひ | 3 たまふ | 4 はべり | 5 たまふる |
| 6 はべる | 7 たまへ | 8 たまふれ | 9 はべれ | |

問2 ア・イ・ウ・エ・オ・カの会話は、それぞれ誰が話したことばか。次の中から選べ。ただし、同じものを二度以上使ってもよい。

- | | | | | |
|--------|------------|------|--------|---------|
| 1 源氏の君 | 2 この院の預りの子 | 3 上童 | 4 例の隨身 | 5 惟光の朝臣 |
| 6 女君 | 7 右近 | | | |

問3 『源氏物語』よりもあとに作られ、その影響をうけている作品を、次の中から一つ選べ。

- | | | | | |
|--------|--------|---------|--------|--------|
| 1 伊勢物語 | 2 大和物語 | 3 宇津保物語 | 4 狭衣物語 | 5 竹取物語 |
|--------|--------|---------|--------|--------|

問4 『源氏物語』の作者紫式部よりあとで活躍し、その影響をうけたと考えられる人物を、次の中から一人選べ。

- | | | | | |
|---------|---------|--------|--------|--------|
| 1 藤原道綱母 | 2 菅原孝標女 | 3 和泉式部 | 4 小野小町 | 5 清少納言 |
|---------|---------|--------|--------|--------|

(以下余白)

4

出典：『大和物語』
明治大学 政治経済学部

解答・解説DVD — Disk 3

【四】 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

下野の国に、をどこ、女住みわたりけり。年頃住みけるほどに、をどこ、妻まうけて、心変はりはてて、この家にありける物どもを、^①今の妻のがりかき払ひ運び行く。心憂しと思へど、なほまかせてみけり。ちりばかりの物も残さず、みな持て往ぬ。ただ残りたる物は、馬ぶねのみなんありける。それを、このをどここの従者、まかぢといひける童を使ひけるして、このふねをさへ取りにおこせたり。この童に女のいひける、「なむぢも今は此処に見えじかし」など言ひければ、「^②なごてか、さぶらはざらん。ぬしおはせずともさぶらひなん」など言ひ立てり。女、「ぬしに消息きこえんは。申してんや。文はよに見たまは」A。ただ言葉にて申せよ」と言ひければ、「いとよく申してん」と言ひければ、かく言ひける。

「ふねも往ぬ まかぢも見えじ 今日よりは うき世の中を いかでわたらん

と申せ」と言ひければ、をどこに「かく」と言ひければ、物かきふるひ去りにしをとこなん、^④しかながら運びかへして、^⑤もとのごとくあからめませす、そひぬにける。

〔『大和物語』より〕

(注) 1 馬ぶね——飼葉桶

2 あからめ——脇見

問1 傍線部①「今の妻のがり」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号で答えなさい。

- 1 今の妻のもとへ
- 2 今の妻のもとから
- 3 今の妻の仮住まいへ
- 4 今の妻の仮住まいを
- 5 今の妻が逃げ去って

問2 傍線部②「などてか、さぶらはざらん」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号で答えなさい。

- 1 どうしてお供しないことがございましょうか。
- 2 どうしておうかがいしないことがございましょうか。
- 3 どうしてお供しないのでしょうか。
- 4 どうしておうかがいしないのでしょうか。
- 5 どうしておうかがいしましょうか。

問3 空欄 A に入る最も適切な語を次の中から一つ選んで、番号で答えなさい。

- 1 むむ 2 むず 3 ず 4 じ 5 まじ

問4 傍線部③「言ひければ」の主語は誰か。文中より探し三字以内で抜き出せ。

問5 傍線部④「しかながら」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号で答えなさい。

- 1 しかしながら 2 ありのまま 3 そのまま 4 かつぎながら 5 そのようにしながら

問6 傍線部⑤に「もとのごとくあらめせで、そひみにける」とあるが、「をとこ」がそのようにした理由として最も適切なものを次の中から一つ選んで、番号で答えなさい。

- 1 「女」が歌の詠める教養のある女性とはじめて知ったから。
- 2 「女」が「まかぢ」と親しくなったのを知り、妬ましくなったから。
- 3 「女」の怨みの深さを知って恐ろしくなったから。

- 4 「女」の思ってもいなかった歌のうまさに感動したから。
- 5 「女」の追い詰められた心情の歌に心を動かされたから。

問7 『大和物語』と同じジャンルの作品を次の中から一つ選んで、番号で答えなさい。

- 1 竹取物語
- 2 伊勢物語
- 3 落窪物語
- 4 源氏物語
- 5 栄華物語

【一】『古本説話集』口語訳

今では昔のこと、大和国にある大金持ちがいた。屋敷の中には山を築き、池を掘って、このうえないぜいたくのかぎりを尽くしていた。門番の女の息子で、真福田丸という者がいた。春、池のほとりに行つて、芹を摘んでいたときに、この長者の秘蔵の姫君が、外に出て遊んでいたのを見たところ、容貌は言いようもないほどすばらしい。これを見てから後、この息子は姫君に対する身の程知らずな恋心を起こして、嘆き続けていたが、このように好きだとさえほめかすことのできる手段もなかったもので、とうとう病氣になつて、どこが悪いということもなく寝込んでしまったので、母は不審に思つて、その理由を無理矢理問いたたしたところ、息子は、事実をありのままに話した。そのような恋心などまったくあつてはならないことなので、わが子は死んでしまうのだろうかと思つて、母もまた病氣になつてしまった。そのとき、この屋敷に仕える女房たちが、この女の家で遊ぼうとして、中に入つてみると、親子二人が病氣で寝込んでいる。不思議に思つて尋ねると、女が言うことには、「たいした病氣ではありません。これこれのことがございますのを、思い嘆いていたので、親子とも死にそうなのです」と言う。女房は笑つて、このことを姫君に話したところ、姫君は氣の毒に思つて、「たやすいことです。早く病氣を治して元氣にならなさい」と言つたので、息子も母親も恐れ多くありがたいと思つて、喜んで、起きあがつて、食事などをして、もどおりになつた。姫君が言うことには、「こつそり手紙などを交わすようなときに、あなたが字が書けないとしたら、残念です。字を習うのがよいでしょう」。息子は喜んで、一、二日で習得した。また姫君が言うことには、「私の父は、もう死期が近い。その後は、何もかもあなたに処置させなくてはならないのに、文字（＝学問）を習わないのは、よくない。学問をしなさい」。息子は、また学問をして、物の道理を見通すほどになつた。また姫君が言うことには、「こつそり私のところへ通つてくるようなときに、子供の身なりであるのは、見苦しい。法師になつてしまうのがよいでしょう」。息子はすぐに法師になつた。また姫君が言うことには、「これということもない法師が私に近寄るようなことは、おかしい。心経・大般若などの経典を誦みなさい。祈祷をさせるようにとり計らひましよう」と言うので、息子は姫君の言うことに従つて経典を誦んだ。また姫君が言うことには、「やはり少しは修行しなさい。加持祈祷をするようにして私に近づくのがよいでしょう」と言うので、息子はまた言われたとおりに修行に立出した。姫君はあわれんで、藤袴をととのえて息子に持たせた。袴の片方を、姫君自身が縫つた。これを着て修行して歩きまわつていゝうちに、この姫君は、ちよつとしたことで病氣になつて亡くなつてしまった。息子はこのように修行して歩きまわつて、一刻もはやく帰らうと思つて帰つたところ、「姫君が亡くなつてしまった」と聞いて、悲しいことこのうえもない。それ以来仏道を信じる心が心底からわきたち、あちらこちら修行をして歩きまわつて、尊い上人におなりになつた。名を智光と申し上げた。最後は往生を遂げた。あとに残つた弟子たちが、死後の法要に、行基菩薩を導師としてお招き申し上げたところ、行基は礼盤にのぼつて、「真福田丸の藤袴、私が縫つた片方の袴」と言つて、他のことは何も言わないでお下りになつてしまった。弟子たちは不思議に思つて、行基にお尋ね申し上げたところ、行基は「亡くなつた智光は、必ず往生するはずの人である。思いがけなく迷いの道に入つてしまつたので、私が、仏道に導くための便宜上の手段として、このように事を運んだのである」とおっしゃつた。

【二】『栄花物語』口語記

殿（＝藤原道長）は、法成寺の御堂にいらつしやうて、すぐに上（＝道長の妻倫子）のもとにいらつしやる。何日かの間は、そうはいってもこの嬪子のお世話で過ぎたので、心が慰むこともあつたが、今はこうだよ（＝嬪子も亡くなり寂しいよ）とお思ひになると、全く茫然としなさつてしまつたので、天台座主が参上なさつて、「深く思い詰めていらつしやることなので、申し上げるにつけても思慮が浅いようでございますが、やはり嬪子さまの死についてどのように悟つていらつしやるのでしょうか。今はあれこれと思ひ紛らして慰めなさるがよいでしょう。この世で、幸福もご意向も、殿のように、思い定めなさつたことに食い違ひなさらず、かないなさる人はいらつしやいましょうか。この三十年の間は全く心がおふさぎになることもなくお過ごしになつたのに、どうしてこのようなことも混じりなさらないでしょうか。この人間世界は、苦樂ともにある所だとは知つていらつしやうたでしょうに。仏でさえも仏教の悟りに入らない人でいらつしやうたとき、耐えがたいことを耐え、忍びがたいことよく忍びなさつて、仏ともおなりになり、この世に生きるすべてのものを仏法の力で悟りの彼岸へ行かせなさるのです。今はこのお嬢様お一人を、一方ではまことにひどいわが亡者だなあ、多くの年月の念仏が無駄になつてしまふのだからかと、情けなくお思ひになり、また反対にいえばすばらしい人を仏道に導きつかけとなる人だなあ、楽しみがあつて苦しみはないとばかり知つていたのを、悲しみも苦しみともに知らせてくれたことだと、さまざまに悟りなさることができて、誠心誠意念仏をなさるならば、ご自分のための仏道への機縁ともなり、亡者のための死後の冥福を祈るきつかけともなるでしょう。長年殿のことをこの世に生きるすべての人を救おうとして仏が人の姿で現れたのだと拝見してきましたが、驚きあきれほど情けなくていらつしやいますなあ」と、世間の道理を申し尽くしなると、「どうしてそれくらいのことをわきまえないことがあろうか。そうわきまえていきますよ。けれども亡くなった娘がただ恋しいのだ」とおっしゃるままに、殿の目から水晶を貫いたように続いた涙がたくさん流れ出て、天台座主もお泣きになつた。座主が念仏を唱えなさる折ごとに、殿がそのたびに念仏を申し上げなると、涙がすぐにさかんに続く。「非常に畏れ多いことで、やはり悲しみもほどほどにして後世を弔い申し上げなさいませよ」とだけ申し上げる人々が多い。

【三】『源氏物語』口語訳

風が少し吹いているうえに、人は少なくて、お仕えしている者はみな寝ている。この院の留守居役の子で、源氏が親しくお使いになつてゐる若い男と、ほかには殿上童一人と、いつもの隨身だけがいるのだつた。お呼びになると、留守居役の子が返事をして起きてきたので、源氏は「紙燭を灯して持つてまいれ。『隨身も魔よけのために弦打ちをして、声を絶やすな』と言いつけよ。人気のない場所で、気を許して寝込んでゐるやつがあるか。惟光の朝臣が来ていただろうがどうしているか」とお尋ねになると、留守居役の子は「控えておりましたが、『ご主人からの仰せつけもない、いったん下がつて未明にお迎えに参上しよう』と申しまして、退出してしまいました」と申し上げる。こうお答へするこの者は、滝口の武士であつたので、弓の弦をいかにもこの場に似つかわしく打ち鳴らして、「火の用心」と言いながら、父の留守居役の部屋のほうに行くようである。源氏は弦打ちの音などから宮中のことをお思いやりになつて、名対面の時刻は過ぎてしまつたであろう、滝口の武士の宿直奏がちようど今頃か、と推測なさるのは、まだそれほど夜も更けていないのだろう。

もとの部屋へ戻つて手探りなされると、女君（＝夕顔）は先ほどのまま横たわつていて、右近はそのそばにうつ伏せになつてゐる。源氏は「これはどうしたのだ。何とも常軌を逸したこわがりようだなあ。このように荒廢したところでは、狐などといったものが、人をおどかさうとして、恐ろしいと思わせてゐるのだろう。私がいるから、そのようなものにはおどかさねはしないぞ」とおっしゃつて、右近をゆすぶつてお起こしになる。右近が「どうにもたまらないほど、気分が悪くなつてきましたので、うつ伏せになつていたのでございます。それよりご主人様のほうがどんなにか、こわがつていらつしやるでしょう」と言うので、源氏は「そう、そのことだ。どうしてこんなにおびえているのか」とおっしゃつて、手探りなされると、夕顔は息もしていない。ゆすぶつてごらんになるが、ぐつたりとして、正気も失せた様子なので、「たいそう子供じみた人だから、魔性のもので正気を奪われてしまつたのだろう」と、途方に暮れた気持ちでいらつしやる。

【四】『大和物語』口語訳

下野の国に、男と女がずっと一緒に暮らしていた。長年暮らした時に、男が新しい別の妻をこしらえて、心がすっかり変わって、この家にあつたいろいろな物を、新しい妻のもとへと全部運んでいく。女はつらいと思うが、やはり男のなすがままにして見ていた。ちりくらの物も残さず、すべて持っていく。ただ残っている物は、飼葉桶だけであつた。それを、この男の従者で、まかじといった童を使っていたがその童に命じて、この飼葉桶までも取りによこした。この童に女が言ったことは、「おまえももうここに来ないだろうね」などと云つたので、「どうしておうかがいしないことがございまいしょうか。ご主人様がいらつしやらなくてもきつとおうかがいするつもりです」などと云つて立っている。女が、「私はご主人様にお便り申し上げようよ。おまえは必ず申し上げてくれるだろうか。ご主人様は手紙は決してご覧にならないだろう。ただ口伝で申し上げよ」と云つたところ、まかじが「本当に確かに申し上げましょう」と云つたので、女はこう云つた。

「ふねも往ぬ…… 馬ふねも持つて行つてしまいます。従者のまかじももう来なくなるでしょう。今日からはつらく不安定な世の中をどのよう
に過こしたらよいのでしょうか。」

と申し上げよ」と云つたので、まかじが男に「奥様がこのように申し上げよとのことす」と云つたところ、物をすべて運び出して去つてしまった男が、そのまま運びかえて、もとのように浮気もしないで、この女と連れ添つていた。

二

『栄花物語』

問 1	ア		1		ウ		5 点 × 3
問 2			6 点				
問 3	1		2		3	4	6 点 × 4
問 4			5 点				

--	--	--	--

/50

三

『源氏物語』

問 4	
問 3	
問 2	ア
問 1	A

4点

4点

	イ	B			
	ウ	C			
	エ	D			
	オ				
	カ				

3点 × 4

5点 × 6

--	--	--	--	--

/50

四

『大和物語』

問 7	問 6	問 5	問 4	問 3	問 2	問 1

7 点 7 点 7 点 7 点 7 点 7 点 7 点

8 点

--	--	--	--	--	--	--

/50

板野博行の 夏期講習DVD 古文・応用編

— 付属テキスト —

- 【一】 『和泉式部日記』
～ 西南学院大学 A日程 (一部改編)
- 【二】 『伊勢物語』
～ 学習院大学 文学部 (一部改編)
- 【三】 『宇治拾遺物語』
～ 明治大学 情報コミュニケーション学部 (一部改編)
- 【四】 『枕草子』
～ 静岡大学 人文学部 (一部改編)
- 【五】 『源氏物語』
～ 千葉大学 教育学部 (一部改編)

『板野の入試国語DVD講座』のご案内

この度は『板野の入試国語DVD講座』をお買い上げいただき誠にありがとうございます。この教材で学習を始める前に、以下の点についてのご確認をお願いします。

■ 学習方法に関して

まずは Disk 1 に収録されている「ガイダンス」を見ましょう。この教材の学習目的から夏の勉強計画、効果的な学習法などを解説しています。

このガイダンスで、入試本番までの全体を見渡す広い視野と、この夏における到達目標をしっかりと持つことが大切です。

そして付属テキストに掲載されている問題を解きましょう。

この夏期講習の教材では、制限時間を意識して解くよりも、1問1問をしっかりと考えて解くということを心掛けて下さい。演習の中で解らない単語や語句などがあれば、解説授業を見る前に辞書などで調べておくとう良いでしょう。

問題を解き終えたら、該当する「解答・解説授業」にて板野先生による解説授業をご覧ください。授業では大事なポイントを板書していきますので、書き写すノートもご用意下さい。

1度授業を見終えても、時間をおいて再度復習を重ねましょう。さらなる理解が深まります。知識や解法がしっかりマスターできるまで、繰り返し学習することが合格への近道です。

■ サポートに関して

DVD 授業の中での解らない点については、メールによる質問・相談サポートを行っております。

ご質問は「イエジユク」(<http://iejuku.jp/>)内の「サポート」ページよりお問い合わせ下さい。

サポートフォームの「件名」欄に 該当の商品名、「お問い合わせ内容」欄に 質問の内容 を詳しくご記入下さい。

いただいたご質問への回答は、メールにて行いますので、メールアドレスの入力はお間違えないようお願いいたします。また、@iejuku.jp ドメインからのメールを受信できるよう各自設定をお願いいたします。



1

出典：『和泉式部日記』

西南学院大学 A日程（一部改編）

制限時間 30 分

解答・解説DVD — Disk 1

【偏差値換算表】

45 点	—	偏差値 70
40 点	—	偏差値 65
★ 35 点	—	偏差値 60
30 点	—	偏差値 55

（★マークは合格ライン）

【一】 次の文章は、亡き為尊親王（故宮）を偲んでいる和泉式部を、今では弟の敦道親王（帥の宮）に仕えるなじみの小舎人童が訪れる場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。

夢よりもはかなき世の中を、嘆きわびつつ明かし暮らすほどに、四月十余日にもなりぬれば、木の下くらがりもてゆく。築土の上の草あをやかなるも、人はことに目もとどめぬを、あはれとながむるほどに、近き^ア透垣のもとに人のけはひすれば、たれならむと思ふほどに、故宮にさぶらひし^イ小舎人童なりけり。

あはれにもののおぼゆるほどに來たれば、「などか久しく見えざりつる。遠さかる昔のなごりにも、思ふを」など言はずれば、「^エそのことさぶらひはづは、なれなれしきさまにやと、つつましうさぶらふうち、日ごろは山寺にまかり歩きてなむ。いとたよりなく、つれづれに思ひたまう。らるれば、御かはりにも、見たてまつらむとてなむ、帥の宮に参りてさぶらふ」と語る。「いとよきこと^ハにこそあなれ。その宮は、いとあてにけけしうおはします。なるは。昔のやうにはえしもあらじ」など言へば、「^カしかおはしませど、いとけぢかくおはしまして、『つねに、参るや』と問はせおはしまして、『参りはべり』と申しさぶらひつれば、『これもて参りて、いかが、見たまふとてたてまつらせよ』とのたまはせつる」とて、橘の花をとり出でたれば、「昔^注の人の」と言はれて、「さらば、参りなむ。いかが聞こえさす。へき」と言へば、ことばにて聞こえさせむも、かたはらいたくて、「なにかは、^サあだあだしくもまだ聞こえたまはぬを、はかなきことをも」と思ひて、
薫る香に^スよそふるよりはほととぎす聞かばやおなじ声やしたると
と聞こえさせたり。

『和泉式部日記』

（注） 五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする（『古今和歌集』）

問1 傍線部コ・サ・シ・スの意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ一つ選び、番号で答えよ。

コ 「かたはらいたくて」

1 ぶしつけなので 2 お気の毒で 3 悲しくて 4 気恥ずかしくて

サ 「あだあだしくも」

1 浮気であるとも 2 表立っては 3 親しくも 4 畏れ多くも

シ 「はかなき」

1 むなしい 2 おもしろい 3 懐かしい 4 とりとめのない

ス 「よそよそ」

1 懐かしむ 2 関係づける 3 心を慰める 4 心を寄せる

問2 傍線部エ「そのこととさぶらはでは」の意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えよ。

1 昔のよしみでもございませんと

2 これという用事でもございませんと

3 もう思い出などもございませんと

4 あなたのことを忘れていたわけではございませんと

問3 傍線部ウ・オ・クの主語はだれか。次の中からそれぞれ一つ選び、番号で答えよ。

1 故宮 2 帥の宮 3 和泉式部 4 小舎人童 5 世間の人々

問4 傍線部キ「参る」・傍線部ケ「参り」の行き先はどこか。次の中からそれぞれ一つ選び、番号で答えよ。

- 1 故宮邸
- 2 帥の宮邸
- 3 和泉式部邸
- 4 宮中
- 5 山寺

問5 傍線部aくdの助動詞の文法上の意味を次の中からそれぞれ一つ選び、番号で答えよ。

- 1 断定
- 2 推量
- 3 伝聞推定
- 4 適當
- 5 勧誘
- 6 尊敬
- 7 自発
- 8 受身

問6 傍線部セ『和泉式部日記』は別名『和泉式部物語』とも称され、歌物語的な性格を持つ作品であるが、次の中から歌物語を一つ選び、番号で答えよ。

- 1 竹取物語
- 2 宇津保物語
- 3 大和物語
- 4 源氏物語
- 5 浜松中納言物語

問7 傍線部力「しか」の指す内容を本文中から抜き出して記入せよ。

問8 傍線部ア・イの読み方をひらがなで記入せよ。

2

出典：『伊勢物語』

学習院大学 文学部（一部改編）

制限時間 20 分

解答・解説DVD — Disk 2

【偏差値換算表】

50 点	—	偏差値 70
★ 45 点	—	偏差値 65
40 点	—	偏差値 60
35 点	—	偏差値 55
30 点	—	偏差値 50

（★マークは合格ライン）

【二】 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

昔、男ありけり。その男、伊勢の国に狩りの使ひに行きけるに、かの伊勢の齋宮なりける人の親、「つねの使ひよりは、この人よくいたはれ」といひやりければ、親の A ことなりければ、いとねむごろに P いたはりけり。 B あしたには狩りに出だしたててやり、ゆふさはりは帰りつつ、そこに来させけり。かくてねむごろにいたづきけり。

二日といふ夜、男、われて「逢はむ」といふ。女もはた、いと逢はじとも思へ A ず。されど、人目しげければ、え逢はず。使ひぎねとある人なれば、遠くも宿さず。女の聞ち かくありければ、女、人をしづめて、子 ね 一つばかりに、男のもとに來たりけり。男、はたねられ I ければ、外のかたを見出だして臥せるに、月のおぼろなる C に、小さき童をさきに立てて、人立てり。男、いとうれしくて、わが D ぬる所に E みて入りて、子 し 一つより 丑 三つまである F に、まだ何事も語らはぬに Q 帰りにけり。男、いとかなくして、ねずなりにけり。

つとめて、いぶかしけれど、わが人をやるべき G にしあらねば、いと心もなくて待ちをれば、明けはなれてしばしあるに、女のもとより、詞はなくて、

君や来 こ ウ 我や行きけむ思ほえず夢か H うつつかねてかさめてか
男、いといたう泣きてよめる、

かきくらす心の闇にまどひ I にき夢うつつとはこよひ定めよ
とよみてやりて、狩りに出でぬ。

野にありけど、心は空にて、こよひだに人しづめて、いととく逢はむと思ふに、国の守 か、齋宮の頭 か かけたる、狩りの使ひありと聞きて、夜ひと夜、酒飲みしければ、もはら逢ひごともえせで、明けは尾張 を の国へ R 立ちなむと E ば、男も人知れず血の涙をながせど、え逢はず。夜やうやう明けなむとするほどに、女がたより出だすさかづきの皿に、歌を書きて出だしたり。とりて見れば、

X 徒人の渡れど濡れぬえにしあれば

と書きて、末はなし。そのさかづきの皿に、続松の炭して、歌の末を^S書きつぐ。

Y また逢坂の関は越えなむ

とて、明くれば尾張の国へ越えにけり。

(『伊勢物語』第六十九段による)

(注)

- 1 狩りの使ひ——朝廷から派遣された巡狩使
- 2 齋宮——未婚の皇女で伊勢神宮に仕えた女性
- 3 使ひざね——正使
- 4 子一つ——午後十一時～十一時半
- 5 丑三つ——午前二時～二時半
- 6 齋宮の頭——齋宮寮の長官
- 7 逢坂の関——京都から東国へ出るときの関所で、警備が厳しいことで知られた。

問1 傍線部P・Q・R・Sの主語は、それぞれ誰ですか。その組み合わせとして、次の1～6の中からもっとも適切なものを

一つ選んで、番号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|-----|-----|--------|-----|
| 1 | P 男 | Q 男 | R 齋宮の頭 | S 女 |
| 2 | P 男 | Q 女 | R 男 | S 男 |
| 3 | P 女 | Q 男 | R 齋宮の頭 | S 女 |

- | | | | | |
|---|----------|--------|-----------|--------|
| 4 | P 女 | Q 女 | R 男 | S 男 |
| 5 | P 女の親 | Q 男 | R 齋宮の頭 | S 女 |
| 6 | P 女の親 | Q 女 | R 男 | S 男 |

問2 傍線部A「こと」、B「あした」、D「ぬ」、E「ぬ」、H「うつつ」を、それぞれ漢字一字で表記し、解答欄に記入しなさい。

問3 空欄「ア」には「り」、**「イ」**には「ず」、**「ウ」**には「き」、**「エ」**には「す」を、それぞれ活用させた語が入ります。適切に活用させて解答欄に記入しなさい。

問4 傍線部C・F・G・Iの「に」の文法的説明として、次の1～6の中からもっとも適切な組み合わせを一つ選んで、番号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 1 | C 断定の助動詞 | F 接続助詞 | G 完了の助動詞 | I 格助詞 |
| 2 | C 断定の助動詞 | F 格助詞 | G 断定の助動詞 | I 完了の助動詞 |
| 3 | C 接続助詞 | F 格助詞 | G 完了の助動詞 | I 格助詞 |
| 4 | C 接続助詞 | F 断定の助動詞 | G 格助詞 | I 断定の助動詞 |
| 5 | C 格助詞 | F 断定の助動詞 | G 格助詞 | I 断定の助動詞 |
| 6 | C 格助詞 | F 接続助詞 | G 断定の助動詞 | I 完了の助動詞 |

問5 傍線部Xの意味として、次の1～4の中からもっとも適切なものを一つ選んで、番号で答えなさい。

- 1 歩いて渡っても、衣が濡れない入り江ほどの浅い御縁でしたので、
- 2 歩いて渡っても、衣が濡れない入り江のような穏やかな関係でしたので、
- 3 歩いて渡っても、衣が濡れてしまう入り江ほどの深い御縁になりましたので、
- 4 歩いて渡っても、衣が濡れてしまう入り江のような厄介やっかいな関係になりましたので、

問6 傍線部Yの意味として、次の1～4の中からもっとも適切なものを一つ選んで、番号で答えなさい。

- 1 いずれまた逢坂の関を越え、困難を克服してでもきつと私を迎えに来てほしい。
- 2 もう一度逢坂の関を越え、困難をおかしてでも私は必ずあなたにお逢いします。
- 3 またの機会に逢坂の関を越え、困難をおかしてでもきつと私に逢いに来てほしい。
- 4 いつかまた逢坂の関を越え、困難をおかして私はあなたと逢ってしまうでしょう。

問7 次の文の中から、本文の記述に合致するものを一つ選んで、番号で答えなさい。

- 1 男は、伊勢に向かう時に、齋宮をつとめる女の労をねぎらうように、女の親から頼まれていた。
- 2 男は、女に逢おうと申し込んだが、女は立場上、人目が気になるので、最初のうちは逢うまいと思っていた。
- 3 男と逢った翌朝、女は、自分から先に男のもとへ便りを送ることができず、男からの便りを待っていた。
- 4 伊勢の国司で齋宮寮の長官を兼ねる人は、酒宴にことよせて、男を、女から遠ざけようとした。
- 5 酒宴の夜の明け方近く、女は男のもとへ出すさかずきの皿に、和歌の上の句だけを書いておいた。

(以下余白)

3

出典：『宇治拾遺物語』

明治大学 情報コミュニケーション学部 (一部改編)

制限時間 25 分

解答・解説DVD — Disk 2

【偏差値換算表】

50 点	—	偏差値 70
45 点	—	偏差値 65
★40 点	—	偏差値 60
35 点	—	偏差値 55
30 点	—	偏差値 50

(★マークは合格ライン)

【三】 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

これも今は昔、桂川に身投げんずる聖とて、まづ祇陀林寺ぎだりんじにして、百日懺法せんぽう行ひければ、^①近き遠きものども、道もさりあへず、拜みにゆきちがふ女房車などひまなし。

見れば、^②三十余ばかりなる僧の、細やかなる目をも、人に見合はせず、ねぶり目にて、時々阿弥陀仏を申す。そのはざまは唇ばかりはたらくは、念仏なんめりと見ゆ。また、時々、そそ息をはなつやうにして、集ひたる者どもの顔を見渡せば、その目に見合はせんと集ひたる者ども、こち押し、あち押し、ひしめきあひたり。

さて、すでにその日のつとめては堂へ入りて、さきにさし入りたる僧ども、おほく歩み続きたり。尻に雑役車に、この僧は紙の衣、袈裟など着て、乗りたり。何といふにか、唇はたらく。人に目も見合はせずして、時々大息をぞはなつ。行く道に立ち並みたる見物のものども、うちまきを霰の降るやうになか道す。聖、「いかに、かく目鼻に入る。堪へがたし。心ざしあらば、紙袋などに入れて、わが居たりつる所へ送れ」と時々いふ。これを^③無下の者は、手をすりて拜む。すこし物の心ある者は、「などかうは、この聖はいふぞ。ただ今、水に入りなんずるに、『きんだりへやれ。目鼻に入る、堪へがたし』^④などいふこそあやしけれ」などささめく者もあり。

さて、やりもてゆきて、七条の末にやり出したれば、京よりはまさりて、入水じゆすいの聖拜まんとて、河原の石よりもおほく、人集ひたり。河ばたへ車やり寄せて立てれば、聖、「ただ今は何時ぞ」といふ。供なる僧ども、「^⑤申のくだりになり候にたり」といふ。「往生の刻限には、まだしかんなるは。今すこし暮らせ」といふ。待ちかねて、遠くより来たるものは帰りなどして、河原、人ずくなに成りぬ。これを見果てんと思ひたる者はなほ立てり。それが中に僧のあるが、「往生には刻限やは定むべき。心得ぬ事かな」といふ。

とかくいふほどに、この聖、たふさぎにて、西に向かひて、川にぎぶりと入る程に、舟ばたなる繩に足をかけて、づぶりととも入らで、ひしめく程に、弟子の聖^⑥はつしたれば、さかさまに入りて、ごぶごぶとするを、男の、川へ下りくだりて、「よく見ん

とて立てるが、この聖の手をとりて、引き上げたれば、左右の手して顔はらひて、くくみたる水をはき捨てて、この引き上げたる男に向かひて、手をすりて、「広大の御恩蒙りさぶらひぬ。この御恩は極楽にて申しさぶらはむ」といひて、陸へ走りのぼるを、そこから集まりたる者ども、童べ、河原の石を取りて、まきかくるやうに打つ。裸なる法師の、河原くだりに走るを、集ひたる者ども、うけとりうけとり打ちければ、頭うち割られにけり。

この法師にやありけん、大和より瓜を人のもとへやりける文の上書に、「前の入水の上人」と書きたりけるとか。

〔『宇治拾遺物語』による〕

(注) 1 百日懺法——百日の間経を誦誦し、罪障を懺悔すること

2 うちまき——降魔のためにまく米

3 なか道す——不詳。まき散らすことか

4 きんだり——祇陀林寺の通称か

5 たふさぎ——下着

問1 傍線部①「近き遠きものども、道もさりあへず、拌みにゆきちがふ女房車などひまなし」の部分について、

A 「さりあへず」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 避けることができないで
- 2 去ることができないで
- 3 そうであるわけではなく
- 4 そうそうは会えないで
- 5 それは合わないで

B 「拝みにゆきちがふ」とあるが、人々は何をしようとしているのか。最も適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 祇陀林寺に参詣しようとしている
- 2 百日懺法を行おうとしている
- 3 聖の入水をやめさせようとしている
- 4 阿弥陀仏の前で念仏を唱えようとしている
- 5 聖の入水が尊いので見ようとしている

問2 傍線部②「三十余ばかりなる僧の」の「の」と同じ使い方の「の」を次の中から一つ選びなさい。

- 1 集ひたる者どもの顔を見渡せば
- 2 この僧は紙の衣、袈裟など着て、乗りたり
- 3 うちまきを霰の降るやうになか道す
- 4 男の、川へ下りくだりて、「よく見ん」とて立てるが
- 5 瓜を人のもとへやりける文の上書に

問3 傍線部③「無下の者」と反対の意味のものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 近き遠きものども
- 2 集ひたる者ども
- 3 物の心ある者
- 4 ささめく者
- 5 これを見果てんと思ひたる者

問4 傍線部④「あやしけれ」と同じ気持ちを表わす表現を本文中から六字で抜き出しなさい。

問5 傍線部⑤「申のくだり」について、

A 「申」の読み方をひらがなで答えなさい。

B それはこの僧が堂に入ってからどの位の時間が経過していることになるのか。次の中から一つ選びなさい。

- 1 一時間位
- 2 三時間位
- 3 半日位
- 4 一日位
- 5 三日位

問6 傍線部⑥「はづしたれば」とは、何を「はづし」たのか。本文中の漢字一字で答えなさい。

問7 『宇治拾遺物語』と同じジャンルのものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 堤中納言物語
- 2 今昔物語集
- 3 伊勢物語
- 4 栄華物語
- 5 平家物語

(以下余白)

4

出典：『枕草子』

静岡大学 人文学部 (一部改編)

制限時間 25 分

解答・解説DVD — Disk 3

【偏差値換算表】

50 点	—	偏差値 75
45 点	—	偏差値 70
★40 点	—	偏差値 65
35 点	—	偏差値 60
30 点	—	偏差値 55

(★マークは合格ライン)

【四】 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

二月つごもり頃に、風いたう吹きて、空いみじく黒きに、雪少しうち散りたるほど、黒戸に主殿寮^{とのもつかさ}来て、「かうてさぶらふ」と言へば、よりたるに、「これ、公任^{きんたう}の宰相殿^aの¹」とてあるを、見れば懐紙^{ふかじ}に、

すこし春ある心ちこそすれ

とあるは、げにけふのけしきにいとようあひたる、^アこれが本^{もと}はいかでかつくべからん、と思ひわづらひぬ。「誰々か」と問へば、「それぞれ」といふ。^イ皆いとはづかしき中に、宰相^bの御いらへを、いかでかことなしびに言ひいでん、と心ひとつに苦しきを、おまへに御覽せさせんとすれど、上^cのおはしまして、^①おほとのごもりたり。主殿寮は「とくとく」といふ。^ウげに遅うさへあらんは、いと取りどころなければ、さはれとて、

空寒み花にまがへて散る雪に

とわななくわななく書きて取らせて、いかに思ふらんとわびし。これが事を聞かばやと思ふに、そしられたらば聞かじと覚ゆるを、「俊賢^{としかた}の宰相など、『なほ内侍に^②奏してなさん』となん定め^③給ひし」とばかりぞ、左兵衛督^dの中将に^④おはせし、語り給ひし。

(『枕草子』による)

(注) 1 黒戸——清涼殿の北、滝口の戸の西側にある部屋。

2 内侍——内侍所の女官。

問1 傍線部①～④の敬語は、それぞれ誰の、誰に対する敬意が表されているか。その人物名を次から選び、記号で答えよ。

- A 作者 B 帝(上) C 中宮定子(おまへ) D 公任の宰相
F 左兵衛督 G 内侍 H 主殿寮 E 俊賢の宰相

問2 傍線部a～dの「の」の用法は、次のどれと同じか、記号で答えよ。

- A 白き鳥の嘴と足と赤き、鴨の大ききなる、水の上に遊びつつ魚を食ふ。(『伊勢物語』)
B 文・才はなほこの朝臣のは優れりけり。(『宇津保物語』)
C ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ(『古今和歌集』)
D 朱雀院の行幸は神無月の十日あまりなり。(『源氏物語』)

問3 傍線部アの「これが本」とは何か、説明せよ。

問4 傍線部イは、誰が、なぜ「はづかし」と感じたのか、説明せよ。

問5 傍線部ウを、「さへ」の意味・用法に注意して口語訳せよ。

(以下余白)

5

出典：『源氏物語』

千葉大学 教育学部（一部改編）

制限時間 30 分

解答・解説DVD — Disk 3

【偏差値換算表】

40 点	—	偏差値 70
35 点	—	偏差値 65
★ 30 点	—	偏差値 60
25 点	—	偏差値 55
20 点	—	偏差値 50

（★マークは合格ライン）

【五】 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

(この文章は、『源氏物語』葵卷のある場面である。源氏の正妻である葵上は夕霧を出産した後も、健康が回復することのないまま病床に臥^ふしていた。源氏は久々の参内の前に、葵上を見舞う。葵上は長年源氏を自分のもとに近づけることなく、二人の関係は冷えきった状態が続いていた。)

御いらへ、時々聞こえ給ふもなほいと弱げなり。されど、「むげに、亡き人」と思ひ聞こえし御ありさまをおぼし出づれば、夢の心地して、^①ゆゆしかりし程のことどもなど聞こえ給ふついでにも、かのむげ^aに息も絶えたるやうにおはせしが、ひきかへし、つぶつぶとのたまひしことども、おぼし出づる^bに、心憂ければ、

「いさや。^A聞こえまほしきこと、いと多かれど、まだいとたゆげにおぼしためればこそ。」

とて、「御湯参れ」などさへあつかひ聞こえ給ふを、「いつ習ひ給ひけん」と、人々あはれがり聞こゆ。

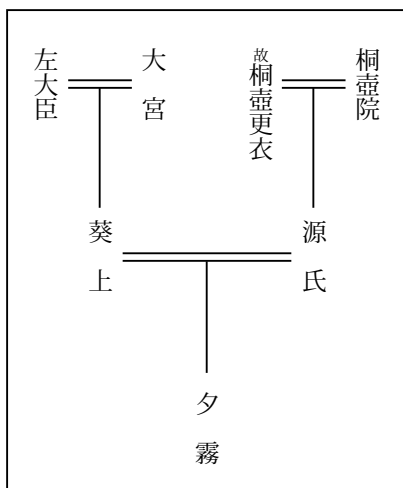
いとをかしげなる人の、いたう弱りそこなはれて、あるかなきかの気色^{けしき}にて臥し給へるさま、いと^②らうたげに心苦しげなり。

御髪の乱れたるすぢもなく、はらはらとかかれる枕のほど、^③ありがたきまで見ゆれば、「^B年ごろ何事を、飽かぬことありて、思ひつらむ」と、あやしきまでうちまもられ給ふ。

「院などに参りて、いと疾^とうまかでなん。かやうにておぼつかならず見たてまつらば、いとうれしかるべき^cを、宮のつとおはするに、心地なくやと、^Iつつみて過ぐしつるも苦しきを、なほやうやう^{II}心強くおぼしなして、例の御座所^{おまし}にこそ。あまり若くもてなし給へば、かたへはかくも物し給ふぞ。」

など聞こえ置き給ひて、いと清げにうち装束^{まゝせ}きて出で給ふ^dを、常よりは目とどめて見出だして、臥し給へり。

(注) 1 むげに、亡き人——どうやっても助かるまい人



- 2 ひきかへし、つづつづどのたまひしことども——うって変わって、ぶつぶつと（物怪の声で）お語りになったことなど。
- この場面の直前で、葵上にとりついた物怪（生き霊）が姿を見せて、源氏に恨み言を言っている。
- 3 いさや——さあ。いやもう。返答をためらう時のことば
- 4 院——源氏の父である桐壺院。次図参照
- 5 宮——葵上の母である大宮。次図参照
- 6 つとおはするに——ずっとそばに付き添っておいでなので
- 7 心地なくやと——思いやりのないことかと思われて
- 8 かたへは——一方では

問1 傍線部①～③の語句の意味を記しなさい。

問2 傍線部 a～dの文法的説明として適切なものを次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 格助詞 イ 接続助詞 ウ 終助詞 エ 完了の助動詞「ぬ」の連用形

オ 断定の助動詞「なり」の連用形 カ 形容動詞の連用形の活用語尾

問3 傍線部Ⅰ・Ⅱの主語（動作主）を記しなさい。

問4 傍線部Aを必要な語句を補って現代語に直しなさい。

問5 傍線部Bからうかがえる、葵上に対する源氏の心境の変化について、簡潔に説明しなさい。

【一】『和泉式部日記』 口語訳

はかないものとされる夢よりもはかないものであった亡き宮様との仲を、嘆き悲しみながら明かし暮らしているうちに、初夏の四月十日過ぎにもなったので、樹々の下はしだいに葉陰の闇が深くなつてゆく。土塀の上の草が青々としているのも、他人は特に目も留めないが、私はしみじみと眺めていたその時に、手前の透垣のそばに人の気配がするので、誰であろうと思つてみると、何と故宮にお仕えしていた小舎人童なのであった。

しみじみと物思いにふけていた時に童が来たので、私が「何故、長い間姿を見せなかつたの。あなたのことを遠ざかる昔の思い出とも思つているのに」などと取次ぎのものに言わせると、童は「これという用事でもございませんと、こちらへの訪問は馴れ馴れしいようでと遠慮いたしておりますうちに、近頃は山寺詣でに向いておりまして。全く頼るあてもなく、所在なく思われますので、亡き宮様のお身代わりにお仕え申し上げようと思ひまして、帥の宮に参上して奉公しております」と語る。私が「それはとてもいい事であるようです。その宮様は、とても上品で近づきがたくていらつしやるそうですね。亡き宮様のようにはとてもいかないでしようね」などと言うと、「そうではいらつしやいますが、反面とても親しみやすくてもいらつしやいますよ、『いつも和泉式部の所へ参上するのか』とお尋ねなさいまして、私が『参上しております』と申し上げますと、『これを持参して、どうぞ覧なさいますか、と言つて差し上げよ』とおっしゃいました」と言つて、橘の花を取り出したので、私はつい「昔の人の」という古歌をつぶやいて、童が「それでは帰参いたしましたよ。どのようにご返事を申し上げたらよろしいでしょうか」と言うので、私は口伝えで申し上げるのも気恥ずかしくて、「何かまうものか、宮様は浮気であるともまだ評判は立つておられぬのだから、とりとめのない和歌ぐらいはよかろう」と思つて、

薫る香に…… 懐かしい人をおもひ出させるという橘の花の薫る香を亡き宮様と関係づけますよりは、あなたのお声を聞きたいものです。兄宮様と同じお声でいらつしやるかどうかと。

とご返事申し上げさせた。

【二】『伊勢物語』口語訳

昔、ある男がいたそうである。その男は、伊勢の国に狩りの使いとしておもむいた時に、その伊勢神宮の齋宮であつた方の親が、「通例の狩りの使いよりは、この方を十分に大切に扱いなさい」と伝えてあつたので、親の言葉であつたから、齋宮は男をたいそう大切に扱つた。朝には狩りに送り出し、夕方帰つて来ては齋宮の邸に來させた。このように心をこめてお世話をした。

二日目の夜、男はどうしても「逢いたい」と言う。女もまた決して逢うまいとも思つていない。けれど、人目も多いので、逢うことも出来ない。この男は正使であるので、離れたところにも泊めなかつた。女の寝所近くに部屋もあつたので、女は人を寝静めて、子の一刻ごろに、男のところへやつて來た。男も女のが気にかかり眠れなかつたので、外の方ばかりを眺めて横になっていると、月の光がおぼろにかすんでいる中に、小さい童を先導させて、女が立つている。男はとてもうれしくて、自分の寝所に連れて入り、子の一刻より丑の三刻まで女といたが、まだ何も話さないうちに女は歸つてしまつた。男はひどく悲しくて、寝ることもなく終つてしまつた。

あくる朝、男は女のが気がかりだけれど、自分の方から使いを差し向けてよいはずもないので、ひどく待ち遠しく女からの手紙を待つていると、夜もすっかり明けてしばらくしてから、女のもとより手紙の文句はなくて、ただ歌だけがあつた。

君や來し…… 〓 あの時あなたがやつて來たのだろうか、私が訪れたのでしょうか。私にはわかりません。あれは寝ての夢のことか、覺めての現実のことであつたのか。

男は、たいそう激しく泣いて返歌を詠んだ。

かきくらす…… 〓 あの時かきくらすして真つ暗に心の乱れた私も、何が何やらわからなくなつてしまつた。逢つたのが夢なのか現実なのかは今夜と詠んでやつて、鷹狩りに出かけてしまふ。

野に一日いたけれど、心はうわの空で、せめて今夜だけでも人を寝静めて、本当に早く逢いたいと思つていると、伊勢の国の長官で、齋宮寮の長官も兼ねている者が、狩りの使いが都から來ていると聞いて、やつて來て一晩中酒宴を張つたので、まったく逢つて話すことも出来ない。夜が明けたならば次の尾張の国へ向かつて出發することになつていたので、男も人知れず血の涙を流すが、どうしても逢うことは出来ない。夜もしだいに明けようとするところに、女の方から差し出す杯の台に、女はひそかに歌を書いて出した。男が手に取つて見ると、

徒人の…… 〓 徒歩の人が渡つても衣がぬれない入江のように浅い二人の縁であつたのではかなくお別れですね。

と書いて、下の句はない。その杯の台に男はいそいで、そばにあつた続松の消え炭でもつて、歌の下の句を書きついだ。

また逢坂の…… 〓 一度は別れても再び逢坂の関を越えて、困難をおかしても私は必ずあなたにお逢いします。

と詠んで、夜が明けると尾張の国へ越えて行つてしまつた。

【二】『宇治拾遺物語』 口語訳

これも今となつては昔のこと、桂川に身投げしようとする聖がいて、まず祇陀林寺で百日のあいだ経を讀誦し、罪障を懺悔する修行をしたところ、近隣の遠方の人々が、道がいつぱいになって互いに避けられないほどに集まり、聖を拝みに行き来する女房車などが隙間もないほど押しかけた。見ると、三十過ぎくらいの僧が、ほっそりとした目を人に見合わせず、眠ったような目で、時々阿弥陀仏を唱えている。その間に唇が動くのは、念仏なのだろうと見える。また時々、ふつと息を吐くようにして、集まった者たちの顔を見渡すと、その目に視線を合わせようとして集まった者たちが、こつちへ押ししたり、あつちへ押ししたりして、ひしめき合っていた。

さて、いよいよその日の早朝に堂に入つて、先に入つていた僧たちが大勢それに続いた。後ろの雑役車に、この僧は紙の衣や袈裟などを着て乗っていた。何と言つているのか、唇が動いていた。人に目を合わせることなく、時々大きな息をついていた。行く道に立ち並んでいる見物の者たちは、降魔のためにかく米を霰が降るようまきらした。聖は、「なんと、目や鼻に米が入ることか。耐えられない。お気持ちがあるのなら、紙袋などに入れて、私がいいた寺へ送つてくれ」と時々言う。これを下賤の者は、手を摺つて拜んだ。少々分別のある者は、「どうして聖はこのようなことを言うのか。すぐにも水に入ろうとするのに、『祇陀林へやれ。目や鼻に入るのが耐えがたい』などと言うのが奇妙だ」などとささやく者もいる。

そうして牛車を進めていって、七条大路のはずれまで行くと、京の町中以上に入水の聖を拝もうとして、河原の石よりも多くの人が集まっていた。川のほとりに牛車を進め寄せて止めると、聖は、「ただいまは何時か」と言う。供の僧たちが、「申（午後四時頃）過ぎになりました」と言う。「往生の時刻には、まだ早いようだな。もう少し暮れるまで待て」と言う。待ちかねて、遠くから来た者は帰るなどして、河原は人が少なくなつた。これを最後まで見届けようと思つている者は、やはり立つている。その中の僧が、「往生に時刻を定めなければならぬのだからか。おかしなことだな」と言う。かれこれするうちに、この聖はふんどし一枚になって、西に向かつて、川にざぶりと入るとき、舟端にある繩に足を引掛けて、どふんとも入らずに、あわてふためくうちに、弟子がこれをはずしたので、さかさまに水に入つて、ごぼごぼとしているのを、川に入つて「よく見よう」と立つていた男が、この聖の手をとつて、引き上げたところ、聖は左右の手で顔をぬぐい、口に入つた水を吐き捨てて、この引き上げた男に向かつて、手を摺り合せて、「なんとも大変なご恩をいただきました。このご恩は極楽でお返し申し上げます」と言つて、陸に走り登つたが、たくさん集まっていた者たちや子供たちが、河原の石を取り、撒いてかけるように投げつけた。裸の法師が、河原に下りて走るのを、集まった者たちが、引き継ぎ引き継ぎ打つたので、頭を打ち割られてしまった。

この法師のことであつたらうか、大和より瓜を人のもとへおくる時の手紙の上書きに、「前の入水の上人」と書いたとか。

【四】『枕草子』口語訳

二月の終わり頃に、風がひどく吹いて、空がとても暗いところに、雪が少しちらついている頃、黒戸に主殿寮の官人が来て、「ごめんください」と言うので、私が御簾の際に寄ったところ、官人は「これは、公任の宰相殿のお手紙です」と言っているのを、見ると懐紙に、

すこし春ある…… || 少し春めいた心地がするよ。

とあるのは、なるほど今日の空模様にとてもよく合っている、これの上の句はどうして付けることができようか、と思いついた。私が「殿上の間には誰々がいるのか」と尋ねると、官人は「だれそれです」と言う。みんなこちらが恥ずかしくなるほどすぐれている人たちの中へ、宰相へのお返事を、どうして通り一遍に言い出せようか、と自分の心一つで苦しいので、中宮様（|| 定子）にご覧に入れようとするが、帝（|| 一条天皇）がいらつしやうて、おやすみになっている。官人は「早く早く」と言う。なるほど下手なうえに遅くまでもあつたならば、全く取り柄がないので、どうにでもなれと思つて、
空寒み…… || 空が寒いので梅の花びらのように散る雪に。

と震え震え書いて与えて、宰相たちは私の返事をどう思っているだろうとつらい。これの評判を聞きたいと思うが、悪く言われているならば聞くまいと思われるが、「俊賢の宰相などが、『やはり帝に申し上げて清少納言を内侍にしよう』とお定めになった」とだけ、左兵衛督で当時中将でいらつしやうった方が、お語りになった。

【五】『源氏物語』口語訳

葵上はご返事を、時々申し上げなさるものやほりたいへん弱々しげである。しかし、「一時はどうやっても、助かるまい人なのだ」と思い申し上げた以前のご様子をお思い出しになると、夢のような気持ちが出て、重態であられたときのことなどを申し上げなさるついでにも、あのすっかり息も絶えたようであらうな方が、うって変わって、取り憑いた物の怪のせいであつたことなども、源氏はお思い出しになると、厭わしい気持ちになるので、

「いやもう。申し上げたいことが、とてもたくさんあるけれど、まだとても苦しく感じておられるようなので」とおっしゃって、「お薬を召し上げれ」などとまでお世話申し上げなさるのを見て、「いつの間になんか覚えなかつたのだらう」と、女房たちもしみじみうれしくお思い申し上げる。

とても美しくいらつしやる方（＝葵上）が、ひどく衰弱しやつれて、生気を失つたかのような様子で臥せつていらつしやるさまは、実にいらしくお気の毒でもある。御髪が一筋の乱れもなく、はらはらとおちかかっている枕のあたりは、比類のないすばらしさとまで源氏には見えるので、「これまで長年どんなことを、この御方に対して不満なことがあるとして、思っていたのだらう」と不思議なほどじつと見守らずにはいらつしやるれない。

「桐壺院の御所へいったん参上して、早々に退出してきましょう。このようにして隔てなくお目にかからせていただくのでしたら、とてもうれしいことでしょうが、母大宮がずっとそばに付き添つておいでなので、思いやりのないことかと思われて、遠慮して過ごしていたのもつらいことですので、やはりだんだんと元氣をお出しになつて、いつものお部屋にお戻りください。あまり子供のように振る舞われるので、一方ではこうしていつまでもよくおなりにならないのですよ」

などと源氏はお申しおきなさつて、まことに美しく装束を着けてお出ましになる様子を、葵上はいつもよりはよけいにじつと注視して見送りながら、臥していらつしやる。

問 1	コ	サ	シ	ス	3点 × 4
問 2					4点
問 3	ウ	オ	ク		3点 × 3
問 4	キ	ケ			2点 × 2
問 5	a	b	c	d	2点 × 4
問 6					3点
問 7					4点
問 8	イ	フ			3点 × 2

--	--	--	--	--	--	--	--

問 1	
問 2	A
問 3	ア
問 4	
問 5	
問 6	
問 7	

5 点
4 点
4 点
5 点

イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ
3 点 × 5	3 点 × 5	3 点 × 5	3 点 × 5	3 点 × 5	3 点 × 5	3 点 × 5	3 点 × 5	3 点 × 5

3 点 × 4

--	--	--	--	--	--	--	--	--

四

『枕草子』

問 5	問 4	問 3	問 2	問 1
			a	③ 誰の
				① 誰の
			b	誰に
				誰に
			c	④ 誰の
				② 誰の
			d	誰に
				誰に

3点 × 4
4点 × 4

6点

10点

6点

 / 50

五

『源氏物語』

問 5	問 4	問 3	問 2	問 1	1	2	3
					a	b	c

10 点

10 点

<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
----------------------	----------------------	----------------------

/50
